







### 三井寺

### 三井晚鐘

八景起原説も濟たれば先づ三井寺から案内を始めませう  
 三井寺は園城寺ともいふ弘文天皇の御子、奥多王の草創にて中興  
 の祖を智證大師とし世に寺門派と稱す昔は僧舎の數も八百五六  
 十あり叡山法師に對抗して闘争せしこともありし程にて随分盛  
 なりしが屢々の火災にて現時は僧舎も五十計りとなり殊に維新  
 以後は境内も過半は官林となりぬ併し名にしおふ佛刹のことも  
 へ名跡も少なからず去れども衆位は御急と考へるから最も著名  
 ところ計へ連れて行かふ

### 三井寺観音

大津市街より西に當り山腹に見ゆる處なり

西國十四番の札所なる也へ俗に順禮觀音ともいふ其上の一  
 段高き處に徳の皇陛下北陸巡幸のとき御登りになつたから御  
 一年に

幸山と名く湖山風光の絶佳ことは到底も稱賛盡すこと不能  
から失當に述べて却て風景を傷ふより寧ろ止めて置ませう

村雲橋 觀音堂の左石級を降り更に左へ三丁程

昔智證大師炎氣の上るを見て唐の青龍寺に火災あるを知り  
此橋に立て水を灌ぎたるに忽ち橋下より雲生じ西へ飛行さ

しと乃で橋の名を村雲と付けた

唐院 村雲橋を渡り左に寶塔のあるところ

智證大師の廟なり傍にあるは黃不動是れは金色の代に黃色  
を彩りしもへ名くるものにて大師の作

金堂 唐院を出れば正面に見ゆる

支那傳來の靈像弥勒佛を安置す堂は四間四面にて豐太閤政  
所の再建

三井水 金堂の右にあり

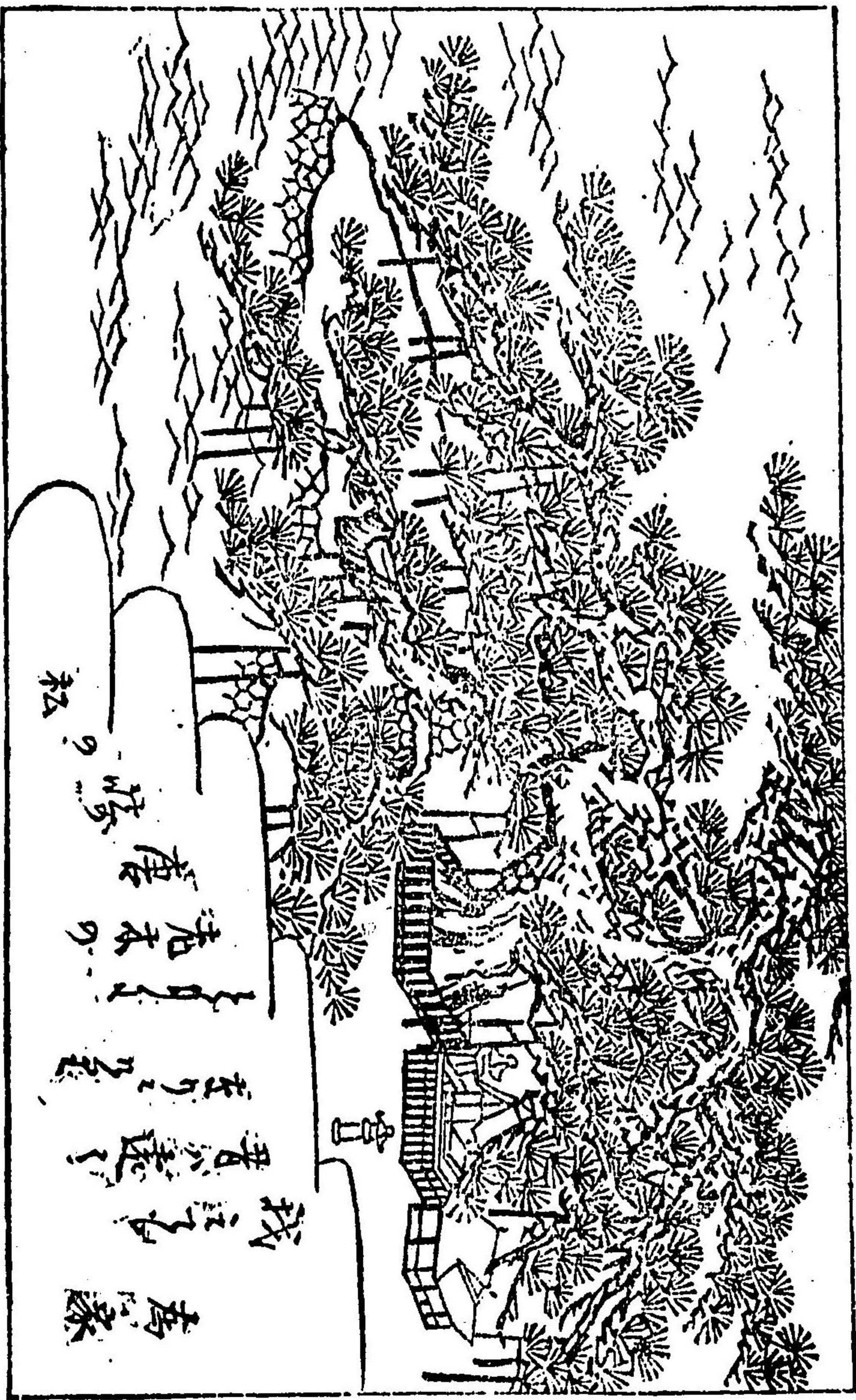
天智天武持統三帝御降誕のとき汲んで産湯に用ひし也へ始  
めは御井水と書さしを智證大師が三天子の産湯に汲みし泉  
といふ意義をとり今の文字に改めしものにて三井寺といふ  
名も此井泉かあるから号けたものであるといふ井戸屋形の  
破風に龍の彫刻あり左甚五郎の名作にて時々飛出すから釘  
を眼の上打ちし譯けとはサト、サト、サト、

破鐘堂 三井水の直ぐ上にあり

所謂辨慶の引摺鐘にて瑕の形状は如何にも地を引摺しかど  
想はるゝがまさか辨慶の引摺しものでもあるまじ是は昔  
山法師多勢にて奪ひ去り無動寺谷(檜山)へ擲したとありと  
いふから瑕は其時分につさしものならん又梵鐘の大さは直  
徑四尺一寸高五尺五寸厚三寸五分龍頭一尺一寸五分

食堂の大鍋

金堂の左石級を下り凡半町



松の葉を  
 釣史は  
 信せぬ  
 一に千僧  
 鍋ともい  
 ふから當  
 寺の盛に  
 して

直徑五尺三寸深三尺二寸厚一寸餘あり俗に辨慶の汁鍋といへども釣史は信せぬ一に千僧鍋ともいふから當寺の盛にして衆多の僧徒ある頃に用ひしものか又は軍事のときにでも使用しものだらう

二王門 食堂大鍋の前にあり

此門の二王は運慶の作にて其角がからびたる三井の二王や冬木立といふ發句を讀みしは此處

是より唐崎へ五十丁車賃は拾錢ぐらい漁船なれば三錢

唐崎

崎

唐崎夜雨

此松を世に一本松といふは孤松といふ意にはあらずして一莖一葉であるからだといふ乃で釣史は試みに落葉を拾ふて調べたるに偶には一莖一葉のものあるを發見ばかりである何分まだ他の松葉を詮索せぬから耽とは申せぬが如斯多數の中に偶に一葉の

ものあるは必此松に限るまいと考へる、シテみると一本松は一莖  
 一葉なるゆへとの説はチト難信又此松を植へたは何年代である  
 かといふに付ても種々説があるよふだが釣史の信ずるは軒端の  
 松と云ふ名木の枯たを惜み更に天正年間てんしやうねんに大津城代新莊駿河守  
 が他より稚松を移して此處に植へたものであると果して此説が  
 眞ならば先づ三百年餘を經し古松にて世にも目出度老樹なれば  
 釣史は一本松といふことを導し日本に二本となき松といふこと  
 にても附會たし明々

是より堅田へ二里半車賃十八錢ぐらい

堅田 堅田浮御堂 堅田落雁

浮御堂は海門山満月寺と号し千体佛を安置す今を去ること凡ソ  
 九百年一條天皇の御代惠心僧都の創立せしものにて風景は古來  
 伊豆の三島に似たりあといふ夫は兎も角も舟の窓から眺めた處



は中々幽雅の趣あり殊に毎歲其期節に向へば來去厂金の此處に  
啼落る風情又一入にて奮も及ばぬ程である

此次は比良の暮雪なるが別に山へ登つたとして見る程のも  
のはなし依て是から大津行の漁船に乗り甲板の上にて景  
色を眺めつゝ談話致そう但大津まで湖上凡三里船賃五錢

### 比良山

比良暮雪

彼山は湖西第一の高山にて山脈連亘恰で屏風を引廻せし如く其  
最高峯は直立九町あり春晩雪尙消へざる間は湖上の眺望一倍  
麗清く大に船中の徒然を慰めるから釣史は何時までも其雪が溶  
けなければよいと念ふ程です……漁笛一聲に

先づ大津へ着たからはより栗津、瀬田を経て石山行と致そ  
う尤も栗津は車の上より眺め瀬田では鳥渡駐車がよし、所  
で石山迄は二里半なれど瀬田で待すから二十錢は呉れど



粟津

粟津晴嵐

曾だろう併し石山行の瀬船も出るから……ンテ船賃は三錢  
大津を出て早や一里膳所の町をも過越しつ松の並木の青々と翠  
橋の一繩手清速軽く打寄る是を粟津の晴嵐にて木曾義仲今井兼  
平等の豪傑が取没せしも此處

又も車は一走り——五六町

瀬田橋

瀬田夕照

此橋を唐橋、夫婦橋などいふは是は橋が大小の二つになつてあるか  
ら夫婦橋といひ橋の作り方が昔時唐製であつたから唐橋と言傳  
しものならん而して大橋は九十六間小橋は廿七間あり扱て此橋  
に付き世に名高は田原藤太と大蜈蚣の話なり田原藤太は秀郷と  
いひ或時此橋を通りたるに大蛇眼を怒らし橋の上に在り秀郷少  
も怖す過けるに忽ち異人立あらはれ我は唯今の太蛇にて橋下に







大蜈蚣は三上山を七巻半して首を橋際に出せしむへ秀郷先づ  
 一矢放ちたるに微懼ともせし態度なし乃で考へしに蜈蚣には唾  
 液の毒になること憶出し此度は矢の根に唾液を塗り放ちたるに  
 蜈蚣は終に斃れしとぞ而して三上山といふは是より三里ばかり  
 東北に當り見ゆる富士山に似たる山にて其周囲は一里十二丁あ  
 りといふから試みに蜈蚣の全身を算出すれば十六万八千尺以上  
 となる嗚呼大蜈蚣乎哉嗚呼荒唐説乎哉

是より石山へは流れに沿ふて十四五丁

石山 石山寺 石山秋月

石山寺は石光山と号す今を去る凡ソ千百五十年前、即ち天平勝寶  
 年間に良辨僧正の草創にて加意輪觀音を安置す西國十三番の札



所なり堂の東に窓あり紫式部源氏物語を書きし處にて源氏の間  
 といふ本堂の少し上に紫式部源頼朝同じく乳母龜谷禪尼等の墓  
 及び經藏、多寶塔、觀月堂、杯あり下向道に就けば鐘樓あり祖師堂  
 り祖師堂の前にある櫻樹は奈良の都の八重櫻を移せしものとい  
 ふ総て岩石は此邊最も多く其形狀の面白きこと譬ふるに物なく  
 且つ鋪たる模様は恰ど大洋中で多年怒濤を受けたようだ  
 是より前路を瀬田まゝ戻り橋を渡りて矢橋へ行く順序な  
 るが道程は瀬田橋より一里十町車賃は拾錢ぐらい併し矢  
 橋は態々出掛る程の景色でもあいかから廢すがよかるうと  
 考へるなれど夫では釣史が筆おしみ否足おしみするなど  
 思はれても仕方があるから兎に角案内は致そうが、、、  
 矢橋 矢橋歸帆

右に高く峙つは比良比叡の両山にて較脊するかど疑はれ大津、膳



信事

直帆引て

矢標を

かへる

船のま

お玉の候

舟の

建風

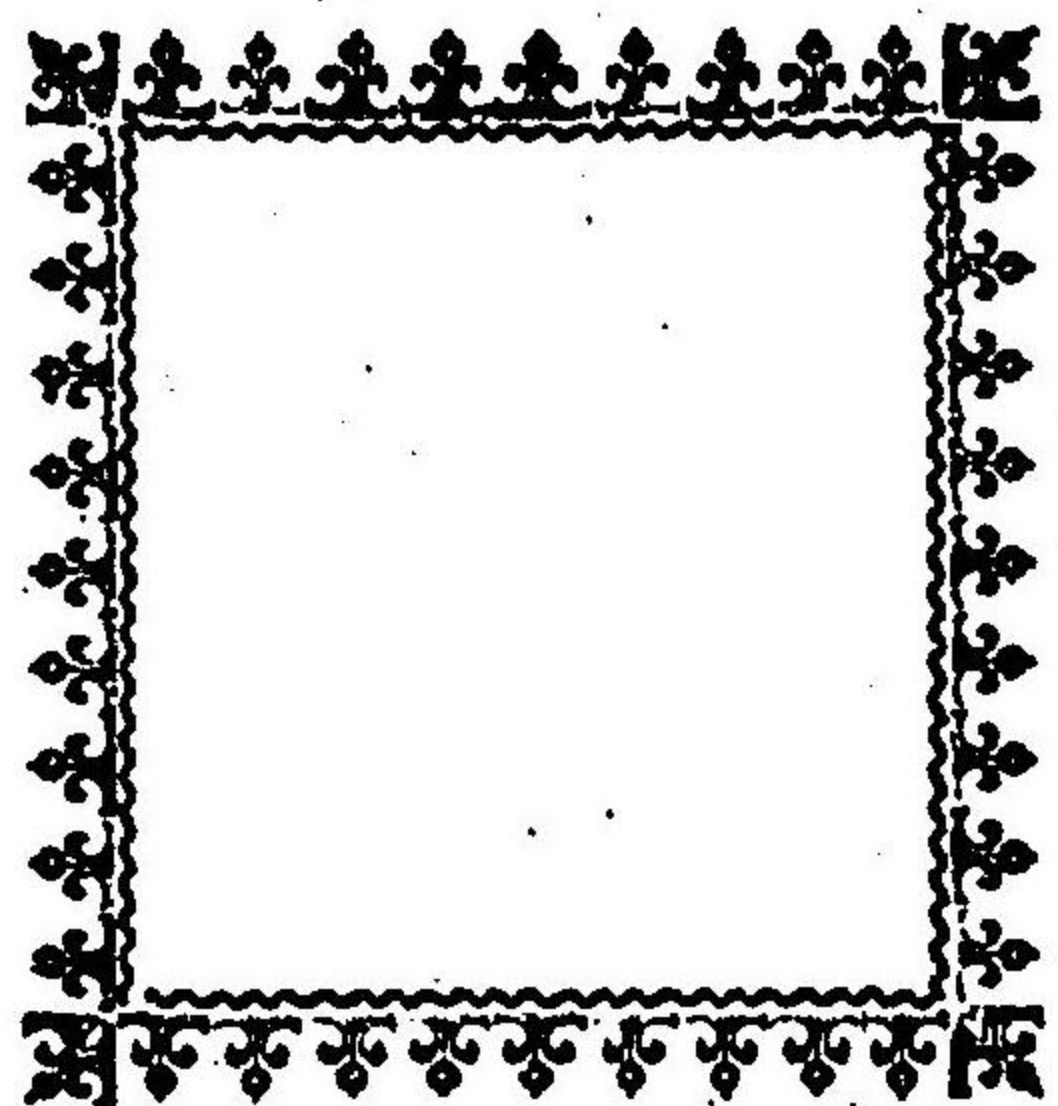
所の人烟は手にとる如く粟津ヶ原や瀬田の橋共に弓手に見ゆる  
 なり殊に膳所城のわりし頃は一層好景なりしとぞ又是より大津  
 へは湖上凡ソ一里餘往時は出舟入舟絶へ間なく最繁昌の溱なり  
 しが近時大に衰微せし

近江八景の案内は是にて終了サヨ  
 ナラ

近江八景案内 畢

明治廿七年六月二十日印刷  
明治廿七年六月廿六日發行

定價金五錢



滋賀縣坂田郡長濱町大字相生  
當時同縣滋賀郡大津町大字境川第拾九番屋敷  
寄留

著作 杉本善郎

發行者 同縣同郡同 町大字中保第八拾番屋敷  
後藤七兵衛

印刷者 同縣同郡同 町大字九屋第六拾三番屋敷  
今井甚太郎

發行所 同縣同郡同 町大字中保第八拾番屋敷  
紫水園

印刷所 同縣同郡同 町大字九屋第六拾三番屋敷  
誠合堂活版部

滋賀縣知事從四位勳四等大越亨公題辭  
少教正梅塘景山豐樹君題詠

江陽釣史杉本善郎君著

### 近江名所案内

七月中出版

本書ハ近江國中ノ名所舊跡ニ就キ一々其由緒ヲ討テ頗ル簡明ニ  
記述シタルモノニテ傍ヲ外國人ノ爲メニ英文ヲ加ヘ別ニ名蹟里  
程圖ナルモノヲ添ヘテ遊覽者ニ便ス其他神社、佛閣、山河、島嶼、城址  
古戰場等苟モ著名ノモノハ必ズ精密ナル圖書ヲ挿入ス依テ一々  
ヒ此書ヲ播クノ諸君ハ恰モ江州ノ風光ヲ掌上ニ指スカ如シ乞フ  
出版ヲ待テ御購讀アラソフナ

滋賀縣大津町大字後在家

古川有慶堂

同縣同 町大字上小唐崎

中井二酉堂

明治廿七年六月

大賣捌所

大津京町五丁目

古川伊助

大津 中井久次郎

澤 宗次郎

小川 義平

島林 專次郎

淡海 堂

東枝 支店

廣田 七次郎

中村 藤兵衛

吉田 作平

西川 勝助

大内 六

入精

長濱 彦根



特51

826

近江八景案内

国立国会図書館

025262-000-0

特51-826

近江八景案内

杉本 善郎/著

M27

ADC-2674

